The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	島崎藤村の身辺書き小説 : ＜個人＞から＜社会＞への回路
Author(s)	Holca, Irina
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60048
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【３】

氏　　名	HOLCA, IRINA（ホルカ　イリナ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学　位　記　番　号	第　２５６９９　号
学位授与年月日	平成24年９月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	島崎藤村の身辺書き小説　―＜個人＞から＜社会＞への回路―
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 教　授　清水　康次　　講　師　合山林太郎

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、島崎藤村作品を対象に、作家の＜私的領域＞がどのような社会的背景を持ち、また作品が社会へどのような批評性を持つかという＜公的領域＞につながる問題を検討しようとしたものである。

「第一章　『春』における＜狂気＞のパラダイム―＜引用＞という叙述方法を視座に―」では、作品の青木という人物の＜狂気＞の描かれ方を中軸として、『春』が実際の出来事から１５年経過した明治４０年の時点からなされる、時代の変化に伴う作者による遡及的な解釈の産物とする。

「第二章　新聞小説『春』における挿絵の機能―名取春仙のリアリズム―」では、作中の文人達の成長物語に共感を覚えた名取春仙が、多視点による人物の＜内面＞を視覚情報として＜翻訳＞するなど、「新型」挿絵の先駆になったと結論付ける。

「第三章　『桜の実の熟する時』の読まれ方―対象前期の文芸投稿雑誌の言説を視座として」では、この作品が『文章世界』の若い読者が明治の大家に親しむという流れの中で受容され、誌上の他の言説とも結合されて読まれたとする。

「第四章　『嵐』論―＜父性＞と＜家族＞のあり様に着目して―」では、作品発表当時の＜新しい母性・父性＞についての強い関心を持っていた藤村が、自分の自伝的小説では珍しい「私」の語りを通して国家貢献ではない＜私的領域＞での父性の確立が可能であることを示したとする。

「第五章　『新生』論―＜他人＞の戦争―」では、フランスで女性の側で＜銃後＞を体験した藤村が、そのことによって姪の節子の立場に思い至りながらも、＜脱男性ジェンダー化＞を果たしきれず、結局は＜銃後＞を守る節子の存在によって、芸術などの「自由な世界」に出られたとする。

「第六章　『ある女の生涯』論―女の心身について―」では、知的障害を持つ４０歳の娘と、加齢と分裂症に悩まされる母親という設定は近代日本の典型的な＜女性＞イメージではなく、同時代の社会的文脈や国家的イデオロギーの外側に配置された特例として仕立てられているとする。

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、一貫して、先行研究の状況に丁寧に目を配りながら、新しい方法を取り込んで、従来の藤村にかかわる論を大きく更新させようとする意欲に満ちた試みであると評価することができる。

第一章における明治４０年の時点への従来の捉え方とは異なる意識的な着目は、これまで見過ごされてきた側面を掘り起こした部分を含む貴重な成果である。第二章に関しては、挿絵画家の存在を前景化したユニークな取り組みであり、新鮮な問題提起であるとともに一定の説得力がある。より広い視野へとつながる可能性がある。第三章での発表雑誌と読者層への注目は、藤村をめぐる研究においては斬新なものである。このことによって開けた視座は貴重であり、他にも応用できることが期待される。第四章では、藤村の女性運動への関心を視野に入れ、さらに作品の展開を着実に踏まえたうえでの＜私的領域＞での父性の確立に至るとの指摘は十分首肯できるものである。第五章での女性の側での＜銃後＞体験という視点は興味深く、問題意識をさらに発展させれば、今後の展開につながる可能性を見せているし、藤村の可能性と限界という問題にもつながろう。また、第六章における、障害を抱える娘の存在への注目も従来の研究を補う新しい成果を含んでいる。

全体としての論述において、留学生に見られがちな用語の使用に見られる問題点も少なく、ほぼ十分といえる水準に達している。

一方で課題も残されている。まず、何よりも申請題目で六本の論文を統一的視座で捉えようとするとするのには無理がある。また、全体を通して、緻密な分析を通して問題点を浮上させていくというよりは、最初に抱いた問題意識の枠組みにそって論を展開しているとの印象を回避できていない。このことは用語の生硬という問題にもかかわっている。また、「＜狂気＞のパラダイム」などについては明治４０年前後についての目配りはあるが、２０年代、３０年代へ目配りは十分だとは言えない。どのように変化したのかという調査と記述が必要である。また、名取春仙の挿絵の画風の変化が、『春』のテクスト内部にあるという保証は実はどこにもないということも指摘しなければならない。各挿

絵の＜読み＞についても一面的だと言わざるを得ない側面がある。さらに、第五章についての「母性保護論争」と作品における＜家族＞の問題をつなげる点で十分に説明されていないという印象がぬぐえない。

こうした問題点もあるが、全体として、最新の研究成果にも注意を払っており、また、論文の叙述も安定している点など高く評価できる。「おわりに」で述べられている「自己イメージの再編成や自作の再編集を意図的に行った」とする点なども今後の発展が期待される。望まれことも少なくないが、これらはより一層の発展を期待するものであり、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。